

支那滿洲瞥見記 (續)

宮本武之輔

菊花蟹

今度の旅行では、各地で善美を極めた支那料理の午餐や

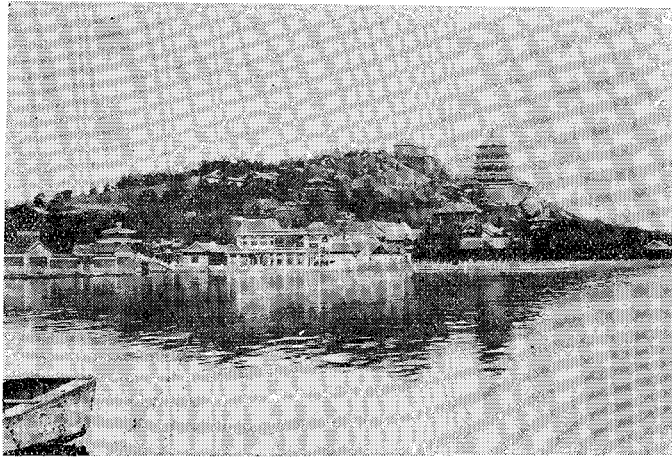
晚餐に招待せられた中でも、吳鐵城上海市長、沈鴻烈青島市長、程克天津市長、袁良北平市長、滿洲では韓雲階新京市長、張景惠國務總理の招宴の如きは何れもその地方の珍味を集めて支那料理の粹を誇るに足るものだったが、わが南京總領事館の歓迎午餐會では長江の蟹を饗せられた。蟹は特に南支で賞味せられ、北支では『秋高く馬肥え……』

と言ふ成句があるのに對して、南支では『菊の花が咲けば蟹が旨くなる……』と言はれるとかで、特に『菊花蟹』と呼ばれる相な。

一口に支那料理とは言つても、廣東、上海、北平、奉天などで多少は特色を異にするが、世界中で最も發達した料理として推稱せられる支那料理は『山にも狩りえ、海に釣り、河に漁り野に求め……』と歌はれる、薩摩琵琶の文句を、そのまゝの苦心がその材料にも調理にも拂はれるのである。

モンテ・クリストがオウトイユの別邸の晚餐會にロシヤのヴォルガ河の胡蝶鮫とイタリヤのフサロ湖の八目鰻とを生きたまゝ取寄せたものを調理させて、パリジャンを吃驚させる話があるが支那料理の究致は畢竟そこにあるのではないかと思ふ。彼等は米國のアスパラガスと日本の鮑とを一つの皿に盛つて、その珍を喜ぶのである。

同時に世界中で、支那民族ほど食事を樂しむ民族は外にはあるまい。食卓に新しい皿が運ばれる度に老酒の乾盃が行はれて、且つ飲み且つ食ふ程に、主客を擧げて飽滿する。その間にはボーイが煙草の罐を開き燐寸を用意して喫煙を勸めて廻る。支那民族に



取つては正に食事は人生に於ける快樂の優なるものである

事が窺ひ知られるのである。

十一月三日星期日下午一時潔樽候

光 袁良謹訂

座設北海公園董事會

之が北平市長の招待狀であつて、

中國では日曜日を星期日と言ひ、月

曜日から土曜日までを星期一、二、

と教へて六に至る。上午、下午は夫

々午前、午後『潔樽候光』は酒席を

設けて光來を待つゝの意である。その

菜單(獸立表)

鮮果 乾果 冷食

一 紅燒魚翅 二 糖醋鯉魚

三 白汁鯉魚 四 乾燒冬笋

五 龍鬚鮑魚 六 芙蓉雞片

八 核桃酪羹

北 平 北 海 公 園 瓊 華 島

七 清炒蝦仁

九 三鮮蒸餃 一〇 油炸鴨肝

一一 象眼餛飩

一二 油酥盒子

一三 清蒸肥鴨

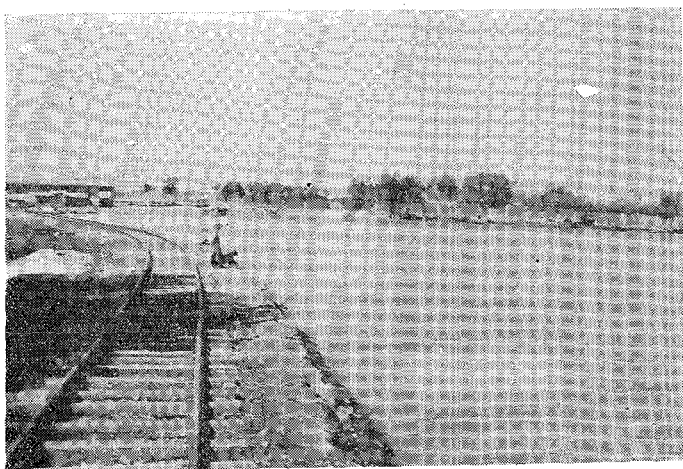
一四 菊花魚鍋

之だけの料理を詰込むのだからあの太鼓腹の支那式の大人ケイレンが出来上るのも當然であらう。

最後の菊花魚鍋は魚肉、鶏肉、各種の野菜などを一緒に煮て、更にそれに菊の花を加へて風味を添へた寄せ鍋で、それを御飯にかけて食べる、非常においしい秋に適應しい料理だつた。

楊子江と黄河

十一月二十九日夜半に近く南京の下關車站シヤクワンから津浦線の



外 構 驛 寧 濟 線 浦 津

列車に乗ると、寝臺車に寝てゐる間に列車は三分せられてフェリイに乗せられ、楊子江を浦口ウルクに渡る。

列車は次の日一日、晩秋の日射しの暖い豊沃なる中部支那の平野を走る。見渡す限り際涯のない大平野である。水の滯りの揚柳と土で固めた倭小な支那民家と、さうしたものゝ外には眼を楽しませる何等の風情もない平野ではあるが、果てしのないその平凡な沃野こそは、中國々民に取つての無限の富源ではないか。而も此のあたりは耕地の土壌の色からが満洲あたりとは際立つて違つて見えるのは、坐るに羨望に堪へない。

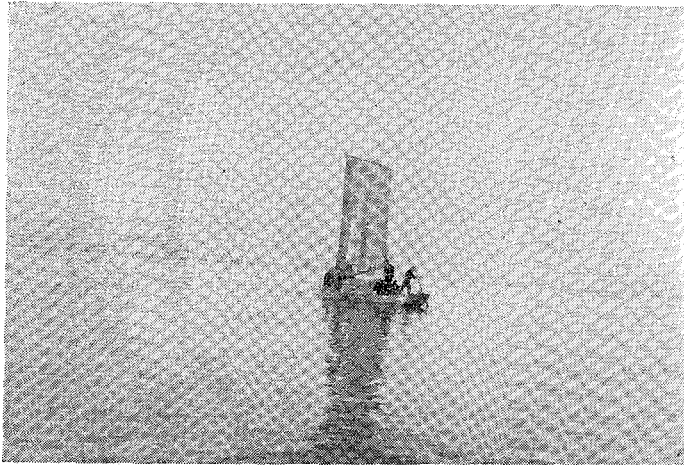
朝十時徐州につくと、此のあたりはもう黄河の氾濫を受けて鐵道線路の兩側は漂渺たる一面

の湖水を現出してゐる。黄河は曹州で破堤して水流の大部

今年の水害は楊子江も黄河も民國二十年の大水害に匹敵す

分は今山東半島の北を流れて渤海灣に注ぐ在來の流路を捨て、所謂舊黄河の河道を辿つて徐州から海州に向つて山東半島の南を黄海に注いでゐるのである。

昔から楊子江は國民に恩恵を與へるけれど黄河は災厄の外何物をも與へないと言はれる程で、楊子江が中支一帯に與へる運輸交通の利便は廣大無邊なるものがあるに拘らず、黄河はその急流と奔湍との故に、殆んど舟楫を通じない。而もその下流部流路約一千料の間は年毎に破堤氾濫の災厄に苦しめられるのであつて、近くは四年前の民國二十年に大水害を被つて、更に又今年の水害である。



西魯を化する大湖

るものであるが、楊子江の如きは漢口や南京の様な、大市街地附近には先年堤防補強の如き水防工事が施された結果、今年も都會地の氾濫は免れる事が出来たが、地方農村の水害は相當甚大なるものがあると報ぜられる。黄河に至つては殆んど計畫的な治水工事の施されたものがないから、洪水は無防備地帯を縦横に馳驅する様な慘狀に放任せられてゐるのである。

今年の水害は楊子江も黄河も民國二十年の大水害に匹敵するものであるが、楊子江の如きは漢口や南京の様な、大市街地附近には先年堤防補強の如き水防工事が施された結果、今年も都會地の氾濫は免れる事が出来たが、地方農村の水害は相當甚大なるものがあると報ぜられる。黄河に至つては殆んど計畫的な治水工事の施されたものがないから、洪水は無防備地帯を縦横に馳驅する様な慘狀に放任せられてゐるのである。

今年の水害は楊子江も黄河も民國二十年の大水害に匹敵するものであるが、楊子江の如きは漢口や南京の様な、大市街地附近には先年堤防補強の如き水防工事が施された結果、今年も都會地の氾濫は免れる事が出来たが、地方農村の水害は相當甚大なるものがあると報ぜられる。黄河に至つては殆んど計畫的な治水工事の施されたものがないから、洪水は無防備地帯を縦横に馳驅する様な慘狀に放任せられてゐるのである。

る。

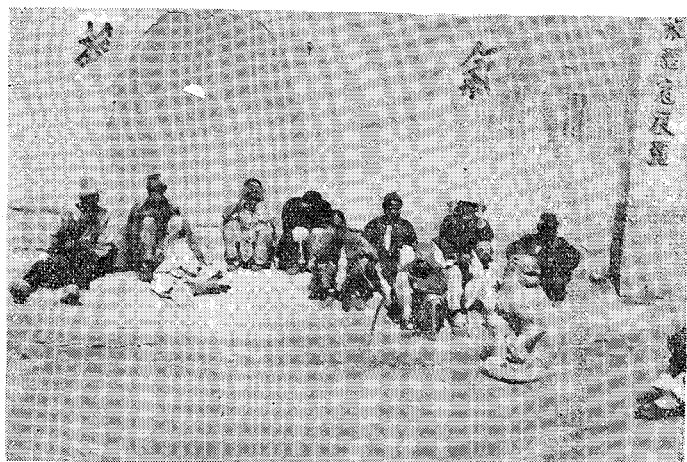
濟南の夜

列車は孔子の廟所として知られる曲阜を過ぎ、有名な泰山を遙に東に見て、夜の八時濟南に着く。

目下支那軍の囑托を受けて、黄河の氾濫状態などを、視察中の滿洲國々道局長直木博士に驛の貴賓室で邂逅し得たのは偶然の喜びだつた。

『僕は之から上海の方へ行くので恐らく新京では會へないと思ふから、此處では是非君に會ひたいと思つてね』

など、人懐っこく話される博士の口から私は北支事情の大體を聞き、又濟南駐在武官の×



嘉祥縣城内の罹災民

×少佐から黄河の洪水の模様を聞き知つたのだつた。

北平に、湯爾和と言ふ政治家がある。醫者の出身で日本の醫學博士の學位を持つた風變りな人物だ相であるが、その湯氏が

『黄河の治水は中國の政治の墮落を象徴してゐる。何等の計畫をも確立し得ないで僅に當面を糊塗するに過ぎない。』

と評したとかで××少佐は此の言葉を引用して、

『誠に味ふべき言葉だ。』

と語つたけれど、私はそれを別に味ふべき言葉だとも何とも思はない。政治が當面の糊塗に終る事例は決して中國だけには限らないし、又さう

した事情は別としても大黄河を改修するためには少くとも

一億から一億五千萬圓の金が必要である事が概算せられるのである。

現在の中華民國が統制せられた完全な國家であり、國民政府が完全な政府であるか否かは多大なる疑問の有する所ではあるが、それだけの莫大なる治水事業費の支出は國民政府としては絶對に不可能であると同時に、完全なる國家や政府に取つても決して容易ではないのである。

由來支那民族は天災や宿命に對しては非常に諦めのよい民族であると言ふ事も注目すべき點であつて、例へば黄河沿岸の住民にしても、連年の氾濫が天災ならば諦めもするけれど、子孫の爲に此の天災を除却輕減せんとする

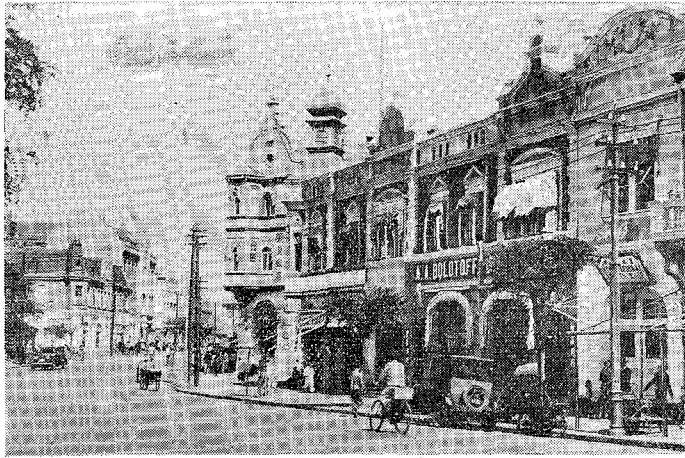
事業を計畫して、その爲に莫大なる費用の負擔に服する様な所謂人災は、絶對に彼等の忍び得ない所である。そこに最大の財源難がある。

私はその後天津在留の友人の一人に黄河治水の要と、その財源難の由來とを説いて、

『今、國民政府がやつてる飛行機購入資金の彩票の様な、治水彩票でも賣出せば、比較的資金の調達が容易ではないか。彩票は中國の國民性には一番適應してゐると思ふが……』

と話した所が、その友人は直に私の説に賛成して、

『一つ具體的な計畫を樹て、山東省政府の韓復榘首席に献策して見る』

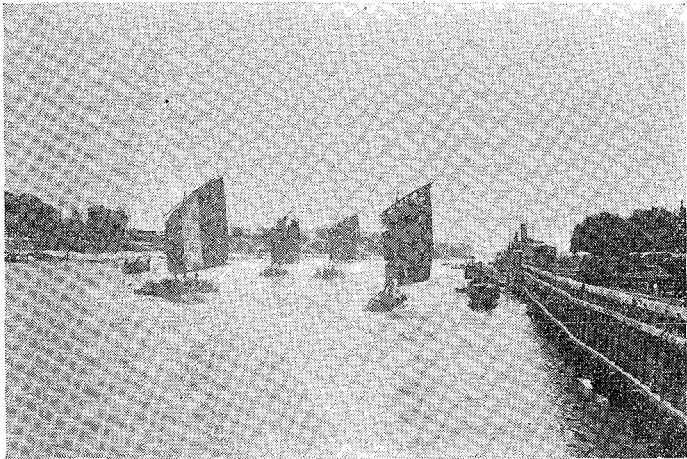


青 島 中 山 路

青島會議

十月三十日の夜の十時に膠濟線の濟南車站を出發して車中で一睡すると、翌日の朝七時四十分に青島に着く。青島は風光明媚と評するに適應しい獨逸流の美しい市街だつた。グラランド・ホテルのヴェランダから見晴らした靜な海には晩秋とも思はれない暖い日光が輝く。

山東省一帯は地味最も肥沃で住民三千六百萬、特に膠濟鐵路沿線は農産、林産、鑛産に富んで、青島港の輸出入貨物年額二百六十萬噸に達し、將來計畫は一千萬噸を目標とすると言ふ話であるが、その發展は容易に之を豫想



し得る。目下第五埠頭、水深九・五米の岸壁約一千二百米

の建造中で、之は大連の福昌公司が請負つて昭和七年七月から工事に着手してゐる。滿洲事變直後の事ではあり、此の請負契約には政治的に非常な難關があつたと言ふ事であるが之が日本人の土木請負業者の北支進出の魁であると聞いて見れば、そこに私は劃期的の意義を感ずるのである。

天津白河江畔

青島では午前中は市政府や膠濟鐵路管理局を訪問して、もとの獨逸總督官邸だつた市の迎賓館で沈市長、葛管理局委員長の招待午餐會に列し午後はグラランド・ホテルの講堂で講演會を聞いたが、引續いての工業關係

係映畫の映寫の如きは、滿場立錐の餘地のない盛況であつ

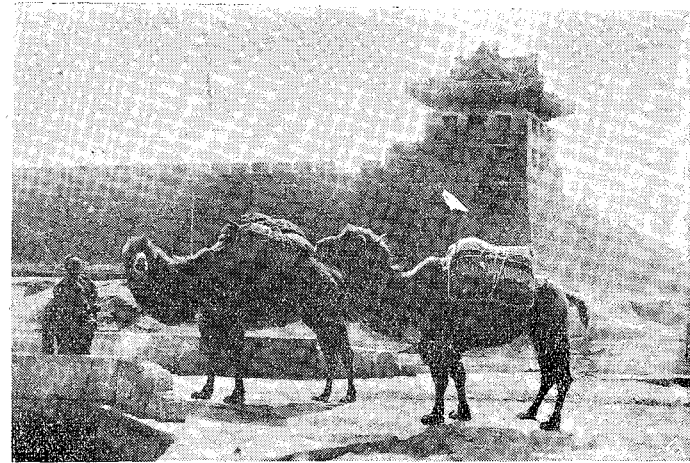
て、そこにはもう上海あたりとは非常に違つた雰圍氣が感
ぜられた。

その夜の十時過の汽車で一行は
もう青島を立つて濟南の方へ引返
す忙しい旅程であつたが、夜は
「大政」で青島日本商工會議所を
中心とする日華兩國側有志の一行
歓迎會が開かれて、兩國親善の和
やかな情景が展開せられた。

私は今度の旅行で支那各地を廻
つて見て、日華親善、經濟提携が
最も緊密に實現せられた好適例を
青島に見出して、無上の喜悅を感
じた者である。それでこそ兩國共
存共榮の理想が具現し得られるの
だ。支那民族は武力の壓迫がなけ
れば到底圓滿に握手し得ない人種だと言ふ風に即斷して仕

舞つて、無暗に佩劍をがちや付かせる事は斷じて國家百年
の長計を完うする所以ではない。

天津會議



外 城 平 北

十一月一日の朝汽車を濟南に乗換
へて、その夜の九時過、天津東站に
下車した一行は英租界内のわが總領
事官邸で催された茶會に列して、そ
の夜はアストル・ハウス・ホテル
に宿泊した、翌二日午前午後に亘つ
て國立南開大學に開かれた天津會議
は、南開大學を中心に諸般の準備が
遺憾なく整へられた結果として、午
前の講演會、午餐會、午後の専門家
懇談會、茶話會に到るまで、誠に整
然たる秩序の下に行はれて、此處で
始めて會議らしい會議が開かれたのであつた。

講演は日本側一名、中國側一名。中國側は北洋工學院々

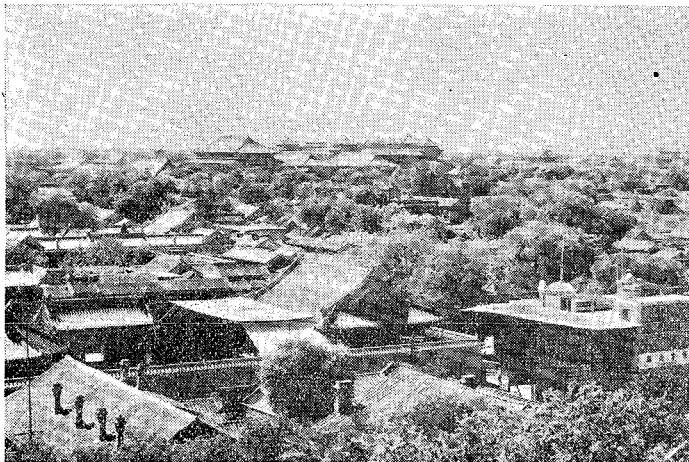
いた安易な氣持で中國人に接し得る様な感じだつた。

長工學博士李書田君の「中國之工
程教育」と題する講演だつた。李
博士の講演の一節――

『工學（工學）は文化建設をそ
の使命とするが故に、中國の工程
教育では造兵、火藥などの様な文
化破壊を目的とする工學を教授
しない……』

は、世の中はさう簡單には片付け
られないけれど、その如何にも中
國人らしい理屈を私は面白く聞い
た。

その日の大學の午餐會には元財
政部々長曹汝霖氏を始め多數の中
國官民が列席して相互の懇親が結
ばれた。上海などゝ違つて北支へ來ると自ら多少警戒を解



平 北 都 森

天津の大公報と言ふのは夙に親日
的新聞として知られ、その總理胡政
之氏とは私は此の天津會議で識合に
なつて、胡氏が日本語を巧に話す所
から、食卓で色んな談話を交へたが
その後例の英國のリースロスを繞る
中國の幣制改革問題に關して、大公
報が猛烈に日本側の態度を非難して
『中國は日本以外の國とは親しめな
いのか。日本が自ら中國の幣制改革
を援助しようともせず、歐米の援助
をも妨害すると言ふのは、中國の自
力更正工作に干渉してその崩壊を坐
視する者ではないか。』

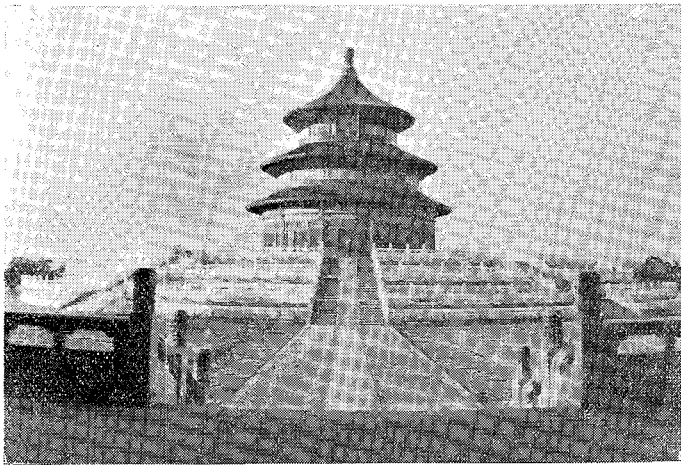
先官憲は之を暴論として激昂したとか新聞に報ぜられた

が、中國側として見れば強ち之を暴論視する何等の理由もない。親日新聞大公報をして排日に轉向せしめる事ありとすれば、その理由に就てわが國民は再三三省の必要があらう。

北支事情

大公報の胡政之氏は固より曹汝霖、湯爾和の諸氏を始め北支には國民黨に屬さない人物が澤山ゐる。それだけに中支あたりとは非常に事情が違つてゐる。例へば中支では一行歓迎の挨拶にしても必ず『日華親善は兩國々民の相互的理解の上に立つ互敬互信を基調として促進せられなければならない。』

と言ふ意味の言葉が述べられるのに對して、北支では



『日本の指導と援助とによつて中國の隆盛を圖りたい。』と言ふ様な文句が屢々使用せられた。

それは單なる儀禮ではなく北支官民の眞情であるとしても、それから又浙江財閥の搾取、國民政府の羈絆から脱して北支人の北支を築く事が彼等の要望であるとしても、さればと言つて中華民國の主權から離脱して他國の支配下に隸屬してまで、所謂善政を謳歌しようとするのが彼等の本心であると即斷するならば、それこそ恐るべき錯誤である。

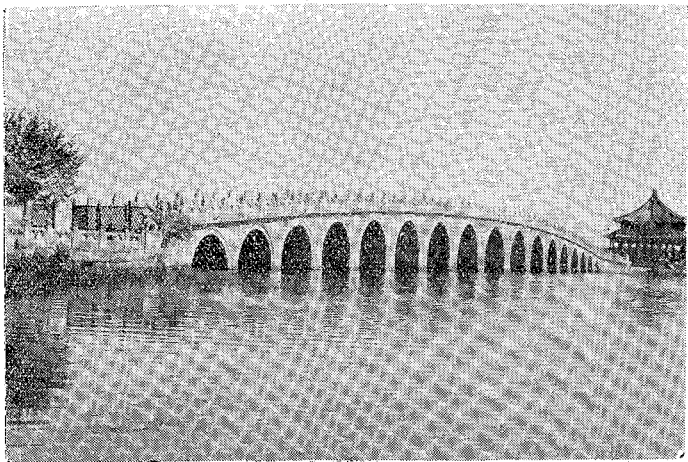
支那駐屯軍司令部を訪問した時の多田司令官の言葉に、

『親日派だとか親米派だとか、色んな評判はあつても中國人の心理は結局中國本位である…』

とあつたのは固より當然であつて、各自の立場と、その時
の情勢とから言つて、日本に依存
するとか、歐米に依存するとかの
別はあつても、結局は中華民國立
國の方途たるに過ぎず、獨り中國
のみならず凡ての國家が何れも皆
その軌を一にするのである。

親日も親米も畢竟中國あつての
便法である。その中國なくして果
して何の爲の親日、何の爲の親米
ぞや。それが中國々民の詐らざる
心理でなければならぬ。

一行が平津滯在當時黄河以北、
山東、山西、河北、齊哈爾、綏遠、
北平、天津、青島の五省三市を打
つて一丸とする所謂北支自治運動
が人民の熱烈なる要求であると言ふ宣傳が盛んに行はれ



橋孔十七の湖明崑山壽萬

て、農民の自治請願さへ各地に起された情勢から、幾多の
迂餘曲折を経て冀東自治委員會、冀
察政務委員會の成立を見た北支今後
の推移は容易に豫斷するを許さない
が、事實は冀の宣傳を裏切つて平津
地方の國立大學學生が聯合して北支
自治反對を叫び、それが全國學生の
抗日運動にまで擴大せんとする形勢
にある事は、東洋工業會議に列席し
た代表の一人として私の極めて遺憾
とする所である。

恰もその時に當つて支那〇〇軍當
局が

『冀察政務委員會の施政が眞に人民
の要望に沿ふや否やを、嚴に監視す
る。』

など、聲明するが如きは不謹慎の甚だしきものであつて、

日華國交の整調、わが民族の大陸經濟發展の將來の爲に誠に長大息を禁じ難い。

北平會議

十一月三日朝九時に天津を立つて正午北平に着く。北平ホテルに這入つて旅裝を更める間もなく北平市政府を訪問して袁良市長の招待午餐會に列席したのであるが、自治運動に絡んで袁氏はその翌日市長の職を辭する程の、北支は慌しい形勢にあつた。

十一月始めの北支は胡砂吹く風の流石に寒く、盛りを過ぎた菊の花に霜が白くかゝる程の蕭條さである。午後は國立北平大學で、北

平清華兩大學の教授連と懇談會を開き、四時から大學講堂



萬壽山佛閣

で講演會が開かれたが、講演者は日本側二名で、中國側の講演はなかつた。

次に兩大學々長の招待狀を掲げる
敬啓者邇以

貴國工業勃興不特冠冕亞東抑且炫耀世界。而諸先生之學術湛深聞望卓著尤爲斯道泰斗。此次惠然西東敝國學術界聞之靡不歡迎鼓舞冀觀霧光。今

軒輶蒞平清華北平兩大學同人亦亟欲一聆

宏論以慰高山仰止之思。爰經商定於十一月三日午後三時在西城祖家街國立北平大學工學院特

開懇談會。敬屈
大駕下臨

指教如荷

臺允曷勝欣幸。此致

宮本武之輔先生

梅貽珂

謹啓

徐誦明

十一月一日

夜は兩大學から王府井大街の承華園での晚餐會に招待せられたが、その夜から北平は朔風が颯々と吹き荒れて百順胡同のほとり、一しを夜の寒さを感じしめた。

翌日のプログラムは北平見物であつたりれど、正午には特に清華大學から午餐會に招待せられて食後三十分ばかりを同大學の參觀に割いた。大學と言へば日本でも同様で、餘り經費が豊でないにも拘らず、特に一行の爲に數度の招宴を張つた事によつても、その歓迎の誠意を酌まなければならぬ。

兩大學の教授には日本留學生出身者も多く、その中の一入、東北大學理學部卒業の楊永芳君が私と食卓を共にしながら、

『先日日本人の友人の家に招待されて、久し振りにお刺魚

やお吸物を食べて迎も懐しく思ひました。』

と親しみのある口調で話すのを聞くと、温い友情が油然として私の胸に満ちるのでつた。人はその故國を愛する如く又會遊の地を愛し會學の學園を愛する。それが人情なのだ。日本留學生をして日本を愛せしめ、日本に親しましめる爲に親切なる後援連絡の方策を講ずる事が日華親善上最も緊急なる所以を、私は今更の如く痛感したのであつた。

古都 北平

北平は遼、金、元、明、清、五朝の都として、燕京、中都、大都、北京などの名を以て知られ、民國十三年國民革命軍の北伐完成と同時に名を北平と改め、續いて國民政府の首都が南京に移される迄の間、約一千年に亘る帝京の地であり、特に清朝の康熙、雍正、乾隆の時代に於ては此の都を中心に燦然たる東洋文化の黄金時代が築かれた由緒の地であつて、中華民國の名を以て呼ばれる現代支那を知るためには上海、南京を見なければならぬと同様に、古

代東洋文化の中に生きる古い支那を語る爲には北平を訪ねなければならぬ。

北平を繞る史跡と名勝とを探る爲には週日を費しても猶ほ足れりとはしないのに、限られた日程で行動する我等の一行には北平の見物に僅に一日が與へられたに過ぎないのは、今でも残り惜しい氣がしてならない。

紫禁城の名を以て呼ばれる宮闕は北平内城の中央に位し之を内廷と外朝とに分つ。帝后の正殿である乾清宮、坤寧宮及び交泰殿、皇帝、皇后、太上皇、皇太后常住の宮殿である養心殿、西六宮、寧壽宮、慈寧宮など、内廷の諸宮は今故宮博物院として一般に開放せられ、太和殿、中和殿、保和殿など、外朝の三殿は同じく古物陳列所として縦覧に供せられてゐるが、紫禁城在來の什器寶物の多くは近年悉く南方に運び去られて、今あるものは多く新たに熱河の離宮から移されたものであると言ふ。

紫禁城の北には宮闕鎮護の爲に築かれた景山があり、その西には北海、中海、南海の三つの湖水が連つて森嚴と蒼

明の情趣掬すべきものがある。

『山河千里國。城闕九重門。不觀皇居壯。安知天子尊。』とは唐詩選の一節であるが、帝城を築くに過分の豪華を以てし、禁廷を營むに無用の壯麗を以てする、その古い思想こそはやがてその社稷を亡ぼす所以の途に外ならなかつた事は、私の北京曾遊の感懷である。今再び北平の皇城を見て更にその感が深い。

外城にある天壇は天子が天を祭り、神に祈つた祭壇であつて、その規模の宏大なる事は正に驚くべきものがあり、地壇、社稷壇、日壇、月壇、先農壇、先蠶壇などの如き天子の祭壇の首位に置かれると言ふ。

北海の中の瓊華島の山上なる喇嘛塔から瞰下せば、一望の裡に收まる北平市街は宛然たる森の都であつて、その森の間から井然たる街路と葦然たる建築とが隱見する。誠に北平は世界にも類例の少い落つきと濕ひとを備へた美しい都である。

北平の西北約十軒の地にある萬壽山は頤和園とも稱して

清期の離宮だつたものであるが、こゝでも亦今更の如く過ぎし清朝の榮華を眼前に髣髴せしめる。萬壽山は昔は龜山と呼ばれたのを乾隆二十五年に皇太后の萬壽節を祝ふ爲に延壽寺を建て、から萬壽山の名に改められたもので、後義和團事件の際英佛聯合軍の砲火の爲に一時荒廢に歸したのを、西太后が恣に海軍擴張費に治定せられた金の大半を割

いて修復したと言ふだけに、水清冽なる昆明湖に配する仁壽殿、玉瀾堂、樂壽堂、排雲殿などの殿堂から、山上の佛光閣、湖畔の石舫の壯麗さは、金銀珠玉の無數の寶物と共に、清朝最後の豪奢を物語る一片の繪卷を見るの感があつて、坐ろに感慨が深い。(未完)

國道と橋梁 (二)

藤田宗光

二、國道橋と延岡

延岡市は宮崎縣が生んだ最初の化學工業都市であり、本縣唯一の新興都市にして、當今大いに世人の注目する處となつたのである。

一、延岡市の發展

縣北に於ける物資の集散地として、豊富なる山産物、水